友好合作都市・中国厦門市より ニイハオ!

第6期 宜野湾市海外留学生
普天間 貴恵 ～その四～

宜野湾市民の皆さん、こんにちは。私の留学生活も残りわずかとなり、厦門（アモイ）を離れるのが少し寂しく感じている今日この頃です。

今回は、先月行った上海旅行についてお話したいと思います。厦門から上海までは一時間弱の飛行時間で、着いた当日は、一緒に行った中国人の友達の家に泊めてもらいました。夜遅かったにも関わらず、友達の両親は温かく私を出迎えてくれました。次の日は朝早く起きて、電車で上海中心部まで向かい、友達の案内で上海のシンボルタワーと呼ばれる建物を見に行きました。東方明珠塔（ドンファンミンジューター）と言い、四六八メートルの高さを誇るアジア一位のテレビ塔だそうです。上海の印象としては、やはり大都市なだけに人の数や高層ビルが厦門よりも多いと感じました。外国人の観光客も多いようで、外国人向けのお店が立ち並ぶストリートも見受けられ、また、日本でも見慣れているユニクロ、吉野家、ローソンなどもあり、少し日本に帰ったような気持ちになりました。週末を利用しての二泊三日という短い日程でしたが、厦門を飛び出し、中国の他の都市を訪れることにより、その土地にはそれぞれの良さがあることを感じることができました。

私の留学生活も終わりを迎えようとしています。一年前、厦門に足を踏み入れた時のことは今でもはっきり覚えています。この一年ここで中国語を学びながら、文化や歴史、慣習にもたくさん触れ、中にはとまどうことも多々ありましたが、普通では味わうことのできない素晴らしい体験をさせてもらったと思っています。

また五月の四川省の地震には大変驚きました。私の先生の家もあって、心の痛む思いでした。

ここでの生活は周りの方の温かさが身に染みて感じる日々でした。留学中いろいろサポートして頂いた宜野湾市役所の皆さん、家族、友達には心から感謝の気持ちで一杯です。そして、宜野湾市民の皆さん、一年間私の留学記を読んでくださり本当にありがとうございました。今後も厦門と宜野湾市の交流がますます盛んになるように願っています。それでは、再見（さようなら）。

東方明珠塔
（ドンファンミンジューター）

茶（ちゃー）ぐわーゆんたく 52

宜野湾育ちの英字新聞

沖縄戦時下では、日本軍人や沖縄住民はもちろん、米兵に至るまで戦争に関する情報は厳しく制限されていました。「ウルマ新報」や「琉球週報」のように戦況を伝える新聞はありましたが、地元住民の手で作られるようになるのは、戦後、三年後から九年後にかけてです。「沖縄タイムス」、「沖縄ヘラルド」などの新聞はこの時期に作られました。

宜野湾村（現市）においては、米軍向け英字新聞「デイリーオキナワン」が一九四六（昭和二一）年から現在の普天間高校の敷地内で編集・印刷されていました。他にも村内で発刊作業をしていた英字新聞としては、「モーニングスター」が挙げられます。「モーニングスター」は、沖縄で発行された唯一の英文商業日刊紙でした。米軍人・軍属やその家族を対象に一九五四（昭和二九）年に創刊され、内容は外電をはじめ、沖縄の政治・経済・社会に関するものや論説を掲載していたようです。

創刊当初は、那覇市の琉球新報社内の一部を借りて発刊していましたが、のちに新社屋を宜野湾市大山に移しました。その後、六〇年代には最盛期をむかえ、販路をグアム・台湾まで拡大しました。

沖縄が本土復帰すると、モーニングスター社の経営者が外国人から日本人に変わり経営は悪化、一九七五（昭和五〇）年には二度のストライキを起こした後に廃刊となりました。

大山に移転したモーニングスター社屋

宜野湾市史への問い合わせ
教育委員会文化課 ☎八九三一四四三〇